



今年の教区の目標

ゆいまーるの心で
あらゆる絆を深めよう！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2021年1月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第746号 (1月号)



2021年頭司教挨拶

ゆいまーるの心で あらゆる絆を深めよう

カトリック那覇教区長 ウェイン・F・バートン司教

那覇教区の兄弟姉妹の皆さん、新年のお慶びを申し上げます。

新たに迎えた今回の新年は、誰にとっても特別なものとなりました。想像をはるかに超えるパンデミックによって、もはや毎年当たり前のように過ごしてきたあらゆる事柄が、当たり前のことではなかったことに気付かされたからです。あらゆることの前提となる命が脅かされる危機を世界中が同時に経験したことで、「世界は一つの村、一つの家族」であることが実感されました。また、同様に世界中に起こった自然の猛威による災害の多発と被災は、飽くなき成長を目指す経済活動に伴う環境破壊と格差社会を鮮明にし、同時に地球がかけがえのない「人類の共通の家である」ことを浮き彫りにしています。もはや、空・海・大地そして、貧困状況に追い込まれた人への配慮や畏敬のない人間活動がこれ以上許容されないところまで、地球環境と社会状況は悪化してしまっただけです。

こうした「世界は一つの村、一つの家族」であること、地球が「全人類の共通の家」

であることへの共通理解をさらに深め、共に存在を与えられたすべての人や被造物とのつながりを見直し、和解し、回復し、深めて行くため、今年の教区目標を「ゆいまーるの心で あらゆる絆を深めよう」としました。

わたしたちの先祖は、限られた自然環境の中、小さな社会生活を営む中でゆいまるるの精神を培ってきました。それは仲の良い、気の合う仲間だけの関係ではなく、たとえ、いざこざやいさかひがあっても近隣の人に対して隣人として協力し合い、受け入れあう精神です。またこのような福音的關係性は、人間だけを対象とするものではなく、あらゆる自然物や環境にまで及んでいます。たとえば、沖縄では台風などの自然現象と戦うのではなく、人がその自然に合わせて低い窪地に家を建て、夏の暑さに抗わず、暑い時間帯は手を休めてゆったりと過ごし、また小さな虫をさえ「いちむしぐわー」(命ある虫と呼んでは、慈しんできました。

人のみならず、あらゆるものとの関係をしなやかにのびやかに生きてきた先人たちの生き方に倣い、あら

ゆる関係性が問われている今こそ、ゆいまるるの精神を活かし、あらゆるものとの関係を見つめ直し、その絆をこれまで以上に深め、広め、強めてゆきましょう。

聖パウロの「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」(ローマ十二・15)というみことばに触れた時、わたしの中にこのような詩が浮かんできた。

「あなたが居るから、わたしは居る。あなたの幸せによって、わたしは幸せになれる。あなたの不幸はわたしの悲しみとなり、あなたの悲しみにわたしは涙する。」

私たちはすべて相対的な存在、親と子、先生と生徒、司祭と信徒、司教と司祭、夫と妻、老人と若者、すべては相手によって自己を自覚し、相手の存在によって支え合って存在する。比較する相手がなければ、幸・不幸も知りえず、自分が何者であるのか誰も分からない。私たちの存在はすべて他者との関係性の中に在る。私たちの存在の深みに確たるものではなく、有るのは神から与えられた関係性の中での存在。誰も単独で、それ自体として存在するのではなく、かかわりの中に存立する者として創造された。

だから、すべての被造物を創造する神の業の一部として描かれ、神と被造物を結ぶかなめとしての使命を託された。いつくしみと愛から被造物を生みだした神の似姿として創造され、生み出した方のごころですべての生み出されたものをいつくしみ、配慮し、養い育て、その存在意義に従って活かすよう招かれている。

海の声、川のささやき、風の歌、空の抱擁、大地の歓喜、あらゆる被造物の賛美は単なる比喩ではなく、霊的な現実、存在の深みの事実。こうした深い真実に触れるとき、私たちはおのずと被造物を愛おしむことが出来るようになる。世界を抱きしめるようになる。創造主のごころで。

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記一・31a)。

被造物の一員としてすべての被造物と共に賛美の声を上げ、ともに在ることを愛でよう。

この一年を通じて、すべての存在との絆に感謝し、その喜びに生きよう。その喜びは、すでにこの世界に満ち満ちている。



2021 New Year's English Message

from Bishop Wayne



“Let us Deepen our Bonds with each Other and with Creation in the Okinawan Spirit of Yui Ma-ru. Dear Brothers and Sisters of Naha Diocese,

This New Year is a special one for everyone. We are all so tired of this pandemic and the New Year seems to be heralding the possibility of a vaccine for everyone. If this turns out to be true, then we here in Okinawa, and people throughout the world, will be able to celebrate a very special New Year. However, for now the number of new cases of the virus are still growing in Okinawa and Japan, so let us continue to be careful for one another's health.

Pope Francis has suggested that we let the pandemic be a chance for us to realize how small our world really is and how interconnected we are to each other and to the earth. He has stated that the world is really “one family” and that the earth is our “common home”. He wants us to show a special concern for those who are poor, those who are marginalized and those who because of the pandemic are unemployed and without sufficient income. He wants us to emerge from the pandemic, not to go back to business as usual, but to learn from what we have suffered to help us to create a more inclusive, just, and peaceful world.

In line with these words of the Holy Father, I would like to suggest that the aim of Naha Diocese for 2021 be: “Let us Deepen our Bonds with each Other and with Creation in the Okinawan Spirit of Yui Ma-ru.”

The Okinawan people from long ago have had a spirit of collective responsibility for one another that they call Yui Ma-ru. It started in the villages where people would help each other for free with the harvesting of sugar cane or the rethatching of the roofs of houses. Everyone would work together and everyone would get their chance to be helped. With the pandemic we have been forced to be separate from one another with masks and social distancing, but for our health and peace of mind, we really need one another; we need to listen to one another and reach out to help each other as well. We are bonded to one another in so many ways. During the coming

year we want to deepen these bonds, especially with those who may feel alone or are facing difficulties in life. St. Paul reminded Christians to, “Rejoice with those who rejoice, weep with those who weep.” (Romans 12:5)

It is good to extend this spirit of Yui Ma-ru not only to people but also to the world around us, placing a special importance on respecting all life forms, and treating the earth as our common home. After he created the world, “God looked at everything he had made, and found it very good.” (Genesis 1:31a). Let us deepen our bonds with nature during the coming year as everything that God has created has been gifted to us and placed in our care.

While giving thanks to God for all our health care workers and praying for those who may be sick or hospitalized during this pandemic, as well as praying for those who have died, let us in creative ways deepen our bonds with one another by reaching out from our hearts though prayer and good works to make sure that everyone knows that they are loved by God and are valuable members of our community. Let us live compassionately. Let us be conscious of our interconnectedness with all of God's creation, by using all that God has given us with prudent wisdom. “The Lord is good to all, and his compassion is over all that he has made.” (Psalm 145:9).

Have a blessed New Year filled with the Peace and Joy of our Lord Jesus Christ.





新年を迎えるに あたって思うこと

デニス・フェルナンデス神父

小祿教会 主任司祭



たないうちに全世界が新型コロナウイルスに襲われました。人々の喜び、予定、計画などすべてが一変しました。思いがけないほどのスピードで全世界に拡大し、仕事、学校、人々の動き、教会活動、ありとあらゆる分野に大きな影響をもたらしました。世界中で、

ると私たちは信じています。すべてのことが神様の計画通り実現するのであれば、なぜ神様がこんな危機をゆるすのか、なぜこのパンデミックを終息させないのか。世の中で罪と罪人たちが増大したから神様が人の滅びを望んでいるのだ、との声も聞こえてきました。しかし、神様の考えと人々の考えは異なります。

神様は人々の苦しみを喜ばれないし、死や滅びを望んでもおられません。ノアの時代に洪水の後、「神は言われた」人に対して大地を呪うことは二度とすまい」と創世記(八・21)に記されています。

神様がイエスをこの世にお遣わしになったのは「世を救うためではなく、御子によって世が救われるためである」(ヨハネ三・17)。

このことから、神様は私たちの平和、救いを望んでおられることがわかります。

全ての出来事の中に 神様のみ手を見る

人類の歴史の中で、地震、台風、洪水、伝染病、経済的危機、事故などによって命が奪われたことが無数に起こっています。その困難の時に、人々が決意を固め、乗り越える努力をして勝利した例が数多くあります。日本での次の出来事もその良い例でしょう。戦後何

もない不幸な荒廃から立ち直り、復興の固い決意で発展して来たこと。二〇一一年、東日本大震災の時も、人と人との絆が深くなったこと。大震災の危機が人々の思いやりを表す機会となったのです。コロナ・パンデミックに振り回されながら、私たちは、生活の新しい様子を学ばせてもらいました。在宅勤務やズーム会議、学生たちはオンライン授業に参加、さらに、霊的活動、ミサなどがインターネットを通じて配信されました。物質的援助だけではなく、精神的な援助、心のケアにも携わることができました。

新しい年を 新しい希望をもって

こうした危機も、人々が想像力や実行力を生かし、生活を続ける機会と力を与えてくれたのです。

二〇二〇年代一年目の年が始まるにあたり、私たちは生活の新しい指針を掲げて出発しなければなりません。コロナ・ウイルスの問題が最終的にいつ解決されるかわからない状況の中で、ウイルスと共に生きるためには、私たちの行動が大切です。

感染拡大を防ぐために責任をもって行動することが重要です。コロナ禍の中で生きる私たちの二〇二一年が、失敗で終わるといふネガティブな考えを捨て、このパンデミックから学んだことを前進するための糧にして、ポジティブな考えを持つようにしましょう。技術的に、科学的に、経済的にどんなに発展したとしても、いのちに対する人間の無力さ、人間らしく生きることを忘れたら何の得もないということを忘れてはいけません。

新しい年を新しい希望、夢、勇気をもって始めましょう。私たちは一人ではなく、聖霊に導かれ、イエスのみ言葉に照らされて生きるのです。神様の計画の中で、私たちになんかことが隠されているかわかりませんが、信じる者には必ず希望の光が点されます。イエスが自分の生涯を通して、苦しみ、の後に勝利があると保証しました。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ十六・33b)。「わたしを強めてくださる方のお陰でわたしにはすべてが可能だ」(フィリッピ四・13)。

聖パウロのこの言葉に促されて始めるこの年に、世界中の人々が一丸となって、この困難を乗り越えることができますように。

皆さまの上に神様の計り知れない恵みと祝福が注がれて、明るい明日への道が開かれますように。

神様が人々の救いを望む

この世の人生、それぞれの生き方は、神様に対する信仰という強い力の上に建てられています。神様が私たちを愛し、見守り、養い、御摂理によつて導いてくださ

旧年を振り返り、
新年に前進する
ちようど一年前、同じ言葉で新年を始めましたが、何週間も経

明けましておめでとうございませす。新しい年が神様の祝福と恵みに満たされた年でありますようにお祈り申し上げます。
コロナ・パンデミックの中にも皆さまは、新しい希望、夢をもって新年を始められたことと思います。コロナ禍の中でそれぞれの不安を抱きながら迎えた新年ですが、どんな事があっても愛である神様の御摂理に委ねながら出発しましょう。

2020年12月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2020年12月1日(火) 11:00~12:30 開催場所: 教区センター

出席者: ウェイン司教、押川司教、デニス神父、クレーバー神父、アジット神父、ナビン神父、パトリック神父、ブイ神父、フランシス神父、ヨアキム神父、ボスコ神父、マイケル神父、ピーター・チェ神父、古川神父、藤澤神父、ロドニー神父、サニー神父、リカルド神父、坂上神父、稲国助祭、新垣助祭、石垣助祭、マーシー・クリストバル、津波古聡、新田選。

議長: ブイ神父

1. 報告及び連絡事項

- ・ 始めの祈りはウェイン司教。冒頭ウェイン司教より、さいたま教区司祭の坂上神父が紹介された。しばらくの間那覇教区に滞在することが報告され、坂上神父の自己紹介と挨拶が行われた。
- ・ ウェイン司教より、与那原の Sr.アンジェラ徳田節子の帰天が報告された。
- ・ 前回(11月会議)の議事録確認—新田。
- ・ 12月9~10日に行われる司教会議にウェイン司教が参加予定であることが報告された。着任と退任される司教たちの歓送会と、虐待等のガイドライン作成がメインテーマとなることが報告された。
- ・ 12月3日(木)の愛楽園教会の公式訪問と聖フランシスコ・ザビエル祝日ミサについて、主任司祭のボスコ神父と確認が行われた。共同司式と参列は可能であるが、事前に住所、氏名の申告と、当日の健康チェックが必要であることが報告された。
- ・ 沖縄県から出された「新型コロナ対策の集中実施」について、津波古事務局長より資料が配られ、説明が行われた。新型コロナウイルスに対する警戒心が薄れ、対策が緩んでいないかをチェックして、クリスマスや新年を迎えて心が浮き浮きしがちな時期ではあるが、コロナは終わったわけではないので、警戒を弛めることなく、安全・安心に過ごすための取組みを強化されるよう要請が行われた。また、ゆるしの秘跡においては仕切りを挟んでいても司祭、信徒それぞれがマスクを着用することや、司教訪問の持ち方も、例年とは違う形に工夫するなど、状況に応じた対応が必要であることが提言された。
- ・ その他
- ・ 教会の呼称について質問があり、アジア・シノドスに対する教皇庁からの指導により、「カトリック」という呼称を前面に置くようにとされていることが押川司教から解説された。例えばコザを例にとるなら、「カトリックコザ聖家族教会」もしくは「カトリックコザ教会」というように、カトリックが前面に来れば良いとのことであった。
- ・ ウェイン司教から、コロナ禍もあり、信徒たちは様々な不安を抱えて日々を過ごしている。司祭たちは寛大な心を持って信徒たちに接するよう要請があった。

2. 審議事項

- ・ スピリチュアルレポート「現勢報告書」の提出について津波古事務局長より説明が行われた。毎年行っている12月31日時点のレポートなので、前年度の人数を把握して増減の確認を行うべきこと、幼稚園、保育園を有する小教区では主任司祭が幼稚園、保育園に記入をお願いして事務局へ報告するよう要請があった。
- ・ 2021年「教区の日」について、コロナ禍の中では、1ヶ所に沢山の人が集まる催しは避けたい。安里をメイン会場として、安里では司教と主任司祭、記念日をお祝いする方々と安里の信徒が集い、他はそれぞれの小教区で、主任司祭と共に感謝ミサを捧げる等の分散開催が提案された。司祭ではパトリック神父が叙階50周年を記念されるが、信徒の金婚のお祝いについては各小教区で調査の上、事務局へ報告されるよう要請が行われた。
- ・ 2021年教区目標について、ウェイン司教から報告があった。来年度に向けて、青年たちと協議して策定した教区目標は、「ゆいまーの心で あらゆる絆を深めよう」とすることが報告された。
- ・ 「カリタス那覇」の活動についてマーシーさんから報告が行われた。複数の小教区から寄せられた支援物資を「ゆいまーる BOX」の運営団体に届けたところ、「カトリック教会」からの支援物資であることを明示して配ってくださったので、福音宣教のためにも良い取り組みであると思った。また、クリスマスに向けて「カリタス那覇 結 Moving Car」活動をはじめたことが報告され、今後も可能な取組みを考え、文化センターを拠点に活動を広めて行きたいとの報告と抱負が語られた。
- ・ マーシーさんから2021年1月の司教予定の確認が行われた。1月24日(日) 具志川教会で開かれる「サントニーニョ祭」に合わせて司教が訪問されることが確認された。
- ・ その他
- ・ 年末12月29日(火)、フィアット修道院においてベトナム人司祭や修道者たちによる一年の感謝のミサが午前11時から捧げられるので、希望する司祭たちに参列の招きがあった。
- ・ 典礼担当のブイ神父より、司祭会議の30分前に集合し、聖体讃美式や、昼の祈りを一緒に唱え、歌う等、会議だけでなく祈りを共にする集いとなるよう取組みたい旨提案がなされ、了承された。
- ・ 次回、司祭助祭拡大会議は2021年1月12日(火) 安里教区センターにて開催される。

2020年12月11日

記録: 新田 選

承認: ウェイン・フランシス・バートン司教

私は現在の沖縄市、当時は美里村だった泡瀬に、昭和四年、五月五日に生まれました。父母、兄、姉、私、そして二歳下の妹という家族構成でした。貧しくもなく裕福でもありませんでしたが、幸せな子供時代でした。

昭和十九年、十五歳になった私は沖縄女子師範学校を受験しましたが、受験生四百人、合格者はたった四十人で、だめでした。それで、泣く泣く、友人達と一緒に東京に集団就職することを決意しました。

東京で私が配属されたのは、東京芝浦電機会社（東芝、川崎工場）でした。

昭和二十年八月に戦争が終りました。やがて東京近郊に米軍が駐留することになり、婦女子は田舎に避難するようおふれ

ができました。私は当時川崎の造船所にいた姉と二人で宮崎にいた従姉妹を頼ることにしました。宮崎の山奥の小さな部落で、米やイモはたくさんありましたが、仕事はなく、やむを得ず米やイモあめなどを運ぶ闇商売のグループに入り、夜汽車で大坂にそれらの品物を運びました。ある日取り締まりの警察官に出会い詰問され、私は正直に答えました。こんな商売をやるのはもういやだと思い、また東京に行く決心をしました。そこにはもう

ひとりの従兄弟のお兄さんがいました。

ところがその兄さんは東京から横浜に移っていましたので私も横浜に住むようになりしました。横浜山の手の外人住宅にメイドとして職をえて、働くことができました。私が間借りしていた家には女学校に通う姉妹がいました。もう一人の間借り人、男子大学生もいて、私たち四人は夜遅くまで議論したりしてました。その男子学生は私が読みたい本を探してくれたり、東京銀座まで連れて行ってくれ

力軍の家族部隊があつて、メイドとして働き始めました。その後三年位して、当時川崎にあった米基地の中の売店で働くことができました。その向かいに教会があつて、私は行ってみたくなり、同僚のジョンさんに頼んで連れて行ってもらいました。それから毎週日曜日のミサに行くようになりました。ジョンさんは那覇の教会にも連れて行つて、レイ司教様にも紹介して下さい、その後、泡瀬教会のクララ先生やバレンティン神父様から要理を学び、洗礼を受

けました。

そのような時、父が心臓病で倒れ、悪いことに妹も結核を発症し、わたしの人生でどん底を這うような苦しい時でした。しかし、

神様は私たち家族を見捨てませんでした。どんなに苦しいときにもすべてを神様に委ねてきましたので、今の私があると思っています。

人事異動で、小さな売店から一番大きな売店に移った私にある出会いがありました。客の紳士の買い物の合計額を計算していたところ、その方が、「あなたは計算が速いね、あなたなら銀行で働けるよ」と言つて下さったのです。なんとその方はアメリカンエクスプレス銀行の一番偉い人だったのです。こうしてわたし

は銀行で働くことができるようになりました。その銀行が入札に負け沖縄から撤退するまで約三十一年間私は働きました。

地元の従業員は全員解雇になったのですが、もう年金をもらえる年になっていたのですが、生活に困ることはないと思ひ、六十歳を前にして、中部商業高校定時課程に入学しました。恥ずかしさも不安もありましたが、真剣でした。若い方たちとの楽しい高校生活でした。卒業後はそのままの勢いで、沖縄短期大学の英語科国際観光学科に入学し、その後沖縄大学の法経学部三年次に編入して、卒業に至りました。その時には私は六十八歳になるうとしていました。卒業式では代表となつて皆の卒業証書を受け取る役目も与えられました。

銀行に勤めている時から、年に一度は海外旅行をしていました。聖地巡礼の旅のローマをはじめとしてヨーロッパ諸国、香港、オーストラリア、アメリカ、カナダ、台湾など十五カ国を旅しました。アメリカには四回行きました。詩吟、写真、ハワイアンフラ、社交ダンス、なども楽しみました。九十一歳になった今は夜になると足腰が痛かったり、気分がすぐれなかつたりする日もありますが、ミサは欠かすことなく与かっています。神に感謝。

たて軸よこ軸

私が歩んだ道

普天間教会 石原 静子

レイ司教の琉球での最初のクリスマス・ミサ①

(翻訳・押川壽夫司教)

戦後、琉球列島の教会復興に派遣された二人のカプチン会宣教師、フェリクス・レイ神父とオーバン・バルトルドス神父。一九四七年九月五日、沖縄上陸。二人は一週間後、奄美大島へ渡り教会復興を始める。十月二十日、

オーバン神父は物資調達のためにすぐにグアムへ、フェリクス・レイ神父が一人奄美に残り、クリスマスを迎える。宣教師不在の琉球で十四年ぶりに捧げられた「降誕聖夜ミサ」の模様をアメリカへ手紙で認めた。

以下はレイ司教の手紙原本の翻訳である。

第 300044 号

C/O M.G.O. NORTHERN
RYUKYU, APO. 331
C/O POSTMASTER, SAN
FRANCISCO

JANUARY 24, 1948

昭和二十三年（一九四八年）

一月二十四日

親愛なる友人の皆様。

皆様からクリスマスのご挨拶をいただき、お礼を申し上げます。

私が今年のクリスマスをどのように過ごしたか気になっていること

でしょう。私は、ご降誕ミサの準備にかなり苦勞をしました。人々がどのようにお祝いしたいのか分からなかったからです。そこで、私は成り行きを待つことにしました。

祭日の一ヶ月ほど前になると、彼らは私のところに来て、真夜中のミサがあるかどうかを尋ねてきました。それまで知らなかったのですが、確かにありますと答えました。一週間ほどして、彼らは再び来ました。今回は、真夜中のミサは高校の講堂で行うべきだという提案でした。手配がなされた。その間、彼らは本格的に歌の練習を始めました。彼らは

MISSA DE ANGELS（天使のミサ）のミサ曲だけでなく、ミサの PROPRIUM（ミサの中で唱える答唱詩篇などの典礼箇所）の部分も、元神学生（石神）の指導のもとで取り組みました。彼が中心となり、約三十名の若い男女の協力を得て、とても熱心に練習をしました。当初は週二回の練習で満足していたが、クリスマスが近づくにつれ、ほぼ毎晩のように練習していた。

公教要理に来ていた少年少女たち、つまり小さな子供たちに何かプレゼントをすることが期待されているのではないかと考えが浮かんできました。それが問題でした。お店では、人々が自分で作ったものを除いては、あまり多くのものを扱っていないのです。そこで私は、クリスマス直前に沖縄に行く米軍基地の友人たちに声をかけてみました。そうすることで、なんとかお菓子を手に入れることができました。それは大したものではありませんが、少なくとも何とかできました。もう一つの準備としては、説教の準備でした。私は、自分で翻訳するには日本語がまだ充分ではなかったため、誰かに手伝ってもらいました。

ここ数日の午後と夕方は、名瀬、大熊、浦上での告解の準備をしていました。説教の準備があるので、深夜ミサの前晩を自分のために使わせてくださいとお願いしていました。

そして最後の日曜日が来ました。すべてが予定通りに進んでいました。クリスマス前の最後の船が沖縄から到着し、アメリカの友人たちからの挨拶とクリスマス・カードと、いくつかの小包が届きました。そのすべてが、私にはとてもありがたく、感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、一つだけ残念なことが

ありました。と言うのは、オーバン神父からの連絡がありません。彼は十月の後半に重要な任務でグアムに向けて出発しました。しかし、クリスマスの祭日には彼と一緒に過ごすことになっていたが、それは実現しませんでした。

クリスマスの前日はとてもいい天気でした。前の週の荒れ狂う風雨とは全く違って天気でした。午後の最後の告解の務めが終わったのが午後六時を少し過ぎた頃、私はため息をつきながら小さなテールの前の畳に腰を下ろし、夕飯の支度をした。コーヒーを飲み終えたばかりの頃、ガラス戸が開かれ、ここから歩いて三時間半ほどのところにある知名瀬という村のカトリック信者の一人だということがわかりました。「神父さん、告解をお願いしてもいいですか？ 私は名瀬に来たばかりなのです」と。数分後に隣の部屋に行くと、数人のカトリック信者が待機していました。ようやく告解が終わったのは夜の十時を過ぎた頃でした。

私が自分の部屋に行くと、カトリック教徒のグループが私の所に来て、話をしていました。そして、私は、芦花部、平、そして最も遠い大笠利村からもカトリック信者が来ていることが解りました。これらの人たちが、夕食後の私を忙

しくさせてくれたのです。船で来た人もいれば、歩いて来た人もいます。その日はトラックは走っていませんでした。そこで私たちはクリスマスの話をしました。彼らはアメリカのクリスマスについて知りましたがっていました。彼らは十四年前の過去のクリスマスの話をしました。ようやく解散する前には、もう夜の十一時になり、私は数分だけ自分の時間を持つことになりました。

十一時四十五分、私は三プロック先の学校まで歩きました。星が出ていて、夜は涼しかった。私は、昼間に学校を訪ねなかったが、少年少女たちは一日中準備のために働いていたことは知っていました。私の右腕であり、元神学生でもある石神さんが監督をしていたので、すべてがうまくいっていることを確信していました。

講堂は市内で一番大きなものです。明かりのついたホールに入るとき、私は敷居のところで立ち止まりました。私はとてもびびくりして周囲を見渡しました。一瞥すると、整然とベンチが並べられ、大勢の人だかりが見えましたが、私の注意は祭壇に向けられていました。祭壇は仮設の舞台の上に設置されていました。

それは白く輝く幻影のようでした。中央を通り過ぎていくと、ホー

ルの片側に聖歌隊がいることに気がつきました。もう一方の側には、緑の草木を集めて幼子の飼いや葉桶を連想させるようなものが配置されていました。しかし、ヨセフ様やマリア様や羊飼いたちの姿はありませんでした。人形だけが、その像をかすかに暗示していた。しかし、二ヶ月というのは、準備にはかなり厳しい期間だったのでないでしょうか。

わたくしたちの御主は、明らかに、わたくしたちが二千前の最初のクリスマスに貧しさを実感し、祭壇に注意を集中させることを望んでいたのです。そして、人々にとってもまたミサは重要なものでした。ある意味で、それは最初のクリスマスのようなものでした。彼らにとつて、連続した十四年の間に迎えた何もないクリスマス間の記憶は、絶望的な未来のように見えたはずで、それが、今やご降誕祭を目の前にして、彼らにとつては身にしみて感慨深いものであったが、それはまた、明るいものでした。十四回も来ては去っていった、何もできなかったご降誕祭。司祭のいないクリスマス、ミサのないクリスマス。今回は違った！司祭がいて、聖なる生け贄を捧げるようになって、ここではちゃんと祭壇もあった！

私はステージを降りて祭服を着

た。聖歌隊はバイオリンの伴奏で「静けき真夜中」の聖歌を歌い始めました。賛美歌の三節目でミサが始まった。

そのミサをなんと表現したものか、言葉で表すことは難しい！今夜の祭壇は生け贄の場所ではありませんでした。祭壇布、ミサ用ぶどう酒とホスチア、十字架、聖体容器、燭台に使われている小さな素焼きの茶碗には、それぞれの物語がありました。



レイ神父(後に司教)とオーバン神父(右)

祭壇布の話は興味深いものです。それは約十四年前、正確には一九三四年十二月十二日にさかのぼります。その日は、奄美大島で最後のミサが行われた日です。名瀬のレンガ造りの教会(教会はアメリカの教会のような美しい建物で、二十年間の労苦を表す威風堂々たるものでした。)でのミサの後、この島にはもう司祭はいなかった。今や、カトリック教徒たちは悲嘆に暮れ、将来を心配していました。迫害が本格的に始まっ

た。しかし、街には小柄な女性がいた。教会に何よりも思いを馳せていた彼女は、残された神聖なミサの聖具が異教徒の手に落ちてしまふことに耐えかねていたのである。ある夜、暗闇に紛れて教会に忍び込み、祭壇布を剥ぎ取り、神聖な器を持ち出して隠した。そのことは当時の憲兵たちの間で大きな波紋を呼び起こした。疑惑はあったが、証拠はなかった。そこで、彼女は尋問され、脅され、自宅は限なく荒らされた。だが、消えた聖なる品々は発見されなかった。十四年間、彼女はそれを隠していた、またいつの日か使えるようになる時が来ることを願って。

今夜、その祭壇布がミサの祭壇に使われていた！私はここでの最初のクリスマスが、そのような経緯で迎えられたことが、何よりもうれしかった。彼女もまた、年月の経過のギャップを埋める「彼女のリネン」だったことを喜んでいたら違いありません。

ろうそく、ミサ・ワイン、ホスチア、十字架は、二人の米陸軍のチャブレン(従軍司祭)からの贈り物だった。彼らは、アップルトン出身のピーター・ヴァン・ダイ

ク神父とニューヨーク、ギャリソン近くのアトーメント会のアンブローズ・ケニー神父だった。これらはほんの数品でしたが、しかし、彼らの偉大な働きは、私たちの宣教活動を始めたことにありました。彼らは、わたしたちの沖縄における軍事規則や礼儀作法を教える家庭教師みたいな方でした。彼らは、ある士官から別の士官へと私たちを引き合わせながら、ここ奄美大島の状況に慣れるのを助けてくれました。

の聖歌の音符を見たことさえありませんでした。しかし、彼らはよくやり遂げました。このご降誕聖夜ミサを生きて生きたものにしたのは、時間と場所、そして何百人もの人々が集まったことではないでしょうか。

祭壇で使った茶碗は池田さんの焼き物工場で作られたものです。工場という言葉は少し誤解を招く。私たちが知っているような工場ではありません。しかし、原始的な窯や粘土を使つて、二人の男が人々のニーズに合わせて井や茶碗などの食器類を作っているのです。製品を仕上げるための材料が手に入らないので、どうしても粗雑な製作品品になってしまっています。彼はまた、私が仮住まいをしている家屋を貸してくれている方です。

の聖歌の音符を見たことさえありませんでした。しかし、彼らはよくやり遂げました。このご降誕聖夜ミサを生きて生きたものにしたのは、時間と場所、そして何百人もの人々が集まったことではないでしょうか。

ミサ自体は敬虔深いもの以上のものでした。聖歌隊がミサ・デ・アンジェリスやプロブリウムの部分を見事に演奏したからではありません。それは期待以上のものだった。二人のメンバーを除いては、一ヶ月前までは誰一人として普通

の聖歌の音符を見たことさえありませんでした。しかし、彼らはよくやり遂げました。このご降誕聖夜ミサを生きて生きたものにしたのは、時間と場所、そして何百人もの人々が集まったことではないでしょうか。

教区NEWS教会

司教様公式訪問

真栄原教会

真栄原教会の記念日である「王であるキリストの祭日」の十一月二十二日、ウエイン司教様の公式訪問がありました。通常、主日のごミサは、日本語と英語の合同ミサで行われますが、今年は三密を避けるため、四月以降、日本語ミサと英語ミサの二グループに分断されていま



た。私たちは、せめて司教様公式訪問の記念ミサだけは、合同ミサを分かち合いたいと考えました。

また、洗礼式と堅信式もこの機会にと準備していましたが、新型コロナウイルス第三波の状況が厳しいものとなり、直前になって、急遽ミサを二回に分け、洗礼式と堅信式も延期することになりました。

当日は、ヨアキム神父様との共同司式で午前九時より日本語ミサ、十時三十分より英語ミサが捧げられました。司教様は、説教の中で、今日の福音(マタイ二十五・40)を受け、最も小さな人を大切にするということで、私たちは天の憐れみを分かち合うことができることを、解説してくださいました。

例として話された、埼玉県大宮におられた時の公園生活者に対する支援と、その際の公園管理者とのやり取りは、人を思う大切さと難しさを考えさせられました。司教様は、コロナ禍の時代における私たちの歩む道を示してくださいと思います。

ミサ後は、信徒ホールで休憩を取っていただきながら僅かな時間でしたが、語らいの場を持つことができました。ウエイン司教様、ありがとうございました。

(千村次生通信員)

訃報

◆泡瀬教会

テレシア 仲宗根 愛子様

二〇二〇年十月二十四日帰天 享年六十二歳

◆南静園教会

アシシのフランシスコ 佐和田 哲夫様

二〇二〇年十月三十日帰天 享年九十一歳

◆保良教会

モニカ 島尻 トミ様

二〇二〇年十一月七日帰天 享年九十七歳

◆与那原教会

アロイジオ 具志堅 晃様

二〇二〇年十一月十二日帰天 享年七十一歳

◆小禄教会

ヨハンナ 仲宗根 たまみ様

二〇二〇年十一月十五日帰天 享年七十九歳

◆石垣教会

マルタ 内間 一美様

二〇二〇年十一月十八日帰天 享年七十九歳

NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーション クララ



TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)

・営業時間 8:30～17:30

・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

http://w1.nirai.ne.jp/yasurai

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～

そうてんしゃ

葬典社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく

☎098-853-1059

